

日本語学習動機づけに与える対日イメージの影響に関する研究：韓国の大学における日本語学習者を事例として

金, 元正

<https://doi.org/10.15017/2534517>

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

| | | | | |
|--------|--|------|-----|-------|
| 氏名 | 金元正 | | | |
| 論文名 | 日本語学習動機づけに与える対日イメージの影響に関する研究 —韓国に於ける日本語学習者を事例として— | | | |
| 論文調査委員 | 主査 | 九州大学 | 教授 | 松永典子 |
| | 副査 | 九州大学 | 教授 | 井上奈良彦 |
| | 副査 | 九州大学 | 教授 | 郭俊海 |
| | 副査 | 九州大学 | 准教授 | 辻野裕紀 |
| | 副査 | 九州大学 | 教授 | 三隅 一百 |

論文審査の結果の要旨

本論文は、JFL (Japanese as a Foreign Language) 環境における日本語学習の阻害要因となると考えられる否定的な対日イメージと日本語学習動機づけとの関連性について、韓国人日本語学習者を事例として解明を試みたものである。「習得に長い年月を要する外国語学習にとって、動機づけはきわめて重要な要因である」が、「韓国という JFL 環境においては、日本語学習動機づけを持続させるための方向づけは充分に行われていない」(李 2003) という状況がいまだ続いており、その解明がまたれている。

本論文では、対日イメージと日本語学習動機づけに関する先行研究を概観し、その成果と問題点を踏まえたうえで、3つの課題を設定している。まず、課題の解明に先立ち、2011年以降の韓国人日本語学習者や日本語関連専攻者などが急激に減少している現象に着目し、その要因について考察を行っている。2015年 JSL (Japanese as a Second Language) 環境で行ったインタビュー調査と2017年から2018年にかけて JFL 環境で行った質問紙調査の結果、減少の要因としては、2011年3月11日に起こった東日本大震災のような「地震・放射能の問題」という回答が最も多かった。さらに「日韓関係の問題(政治・歴史など)」、「中国語志向の影響」、「日本語学習のメリットの減少」などが続き、日本語学習者の減少要因としては日本に対する否定的なイメージとの関連性のみならず他の要因も複雑に関係していることが確認された。

次に、課題1の「韓国人日本語学習者が持つ対日イメージとその影響要因は何か」について分析している。その結果、日本に対しては「規則・時間を遵守する」(91.0%)、「先進国である」(89.9%)などの肯定的なイメージが強い一方で、「地震が多い国である」(95.6%)、「放射能の国である」(73.3%)などの否定的なイメージもいまだ根強い。日本人に対しては、「迷惑をかけない」(94.4%)、「礼儀正しい」(89.6%)、「親切・やさしい」(87.6%)などの肯定的なイメージが優勢でありながらも、「本音をよく言わない」(78.4%)、「二面的(表と裏がある)」(68.0%)などの否定的なイメージも少なからず持っている。このようなイメージに与える影響要因としては「日本の漫画・アニメ」(75.6%)、「日韓関係(政治・歴史など)」(74.2%)、「日本語・日本関連授業」(72.7%)などが挙げられるが、「地震」と「放射能」という要因もそれぞれ5割以上得られた点から、依然その否定的な要因の影響力が少なくないことが確認された。

課題2の「韓国人日本語学習者が持つ日本語学習動機づけは何か」については、「日本を旅行したい」(89.6%)、「日本語の実力向上が嬉しい」(86.5%)、「日本人と交流をしたい(友達作

りなど)」（77.8%）などの内発的動機づけにより日本語学習が動機づけられている傾向にある。ただし、専攻者と非専攻者を比較した結果、「日本語学習を始めた理由」「継続している理由」「日本語学習を将来にどう活かしたいか」に対して、専攻者の場合は日本語学習を始める時には内発的に動機づけられていたものが、日本語学習開始以降は外発的動機づけに変化していた。一方、非専攻者の場合は、始めから継続までは内発的動機づけが堅持されているが、最終的には外発的動機づけに変化していた。つまり、日本語を専攻している立場とそうではない立場は、日本語学習を継続している動機づけは大きく異なるが、最終的には「就職のため」という外発的動機づけへと収束し、両群の目的は同様となることがわかった。他方、「地震・放射能に関係なく、日本語学習が好き」という回答が7割以上にのぼっている点から、「地震・放射能」という「災害への不安」が日本語学習を通して退行していることがうかがえる。

課題3の「否定的な対日イメージが日本語学習動機づけに与える影響は何か」については、重回帰分析による結果として、日本の「災害への不安」と「日本への違和感」、日本人の「冷たさ」と「二面性」という否定的な対日イメージは日本語学習動機づけへの正の影響が見られた。つまり、「災害への不安」というイメージは、日本語学習を継続している理由という文脈においては、「道具的志向」という動機づけに弱いながら正の影響を与えていることが明らかになった。また、「日本への違和感」、「冷たさ」、「二面性」というイメージは、「日本文化への興味・関心」などといった動機づけに正の影響を与えていることがわかった。この点から、韓国人日本語学習者は韓国と日本との違いについて不安や違和感を抱きつつも、日本語学習を通してそれを合理的に解釈する、興味・関心へと変換・調整することにより、学習を継続させていることがうかがえる。

従来の研究では当該国への肯定的なイメージが日本語学習動機づけを促進することは指摘されてきたが、本論文では否定的なイメージでさえも日本語学習を内発的・外発的に動機づけ、学習を継続していく要因となることを明らかにした。言い換えれば、JFL環境における学習者は目標言語の国に対する不安や否定的なイメージを合理的な解釈や調整を通して学習動機づけと関連づけることにより、学習を持続していつていることが示唆された。

以上のように、本論文では、日本語学習を始めた理由、継続している理由、将来にどう活かすかという学習の段階性に注目することにより、日本語学習の動機づけの阻害要因となると考えられる「災害への不安」や「日本人の二面性」といった否定的なイメージでさえも、学習者自身による内発的調整により変化していくことを、韓国人日本語学習者を事例としたデータにより実証的に明らかにしている。つまり、学習者は社会情勢やメディアなどの外発的な要因による固定化した対日イメージや日本の大衆文化への興味にとどまらず、日本語学習を通して内発的に学習を動機づけ、対日イメージを再構築していく可能性があることを示している。これまで日本語を日常的に使う環境ではない海外における日本語学習の場合、学習動機づけを持続させるための方向付けを行うことがきわめて重要であることは指摘されてきたが、学習者の当該国へのイメージ形成が日本語学習促進にどうつながるかは解明されてきていなかった。この点において、対日イメージ形成理論と自己決定理論を枠組みとして両者の関係性をモデル化して示し、日本語動機づけの変化に対応した日本語教育の必要性を提起した点は本研究独自の成果である。よって、本研究の知見は、第二言語習得研究における学習動機づけ理論に貢献をなし得るものとして、博士（学術）に値する価値ある業績であると判断された。